

入選 中学生の部

本当の親切とは

静岡県立浜松西高等学校 中部部 三年

石井 ひかる

「人に注意すること」これはとても難しく、
て勇気のいることだと思えます。少なくとも
私には家族以外の人に注意することは、相
当の覚悟を決めなければ出来ません。しか
し、それが出来る人はカッコいいと私は思
います。そして、それは、見方を変えれば「親
切」にもなることを実感しました。父や母、
先生方などが私たちに注意するのは、私た
ちに対して愛情があったり、もっとこうなっ
てほしい、という期待があったりするからだ
と思えます。友達ではどうでしょうか。私の
場合は嫌われたくないという気持ちで勝っ
てしまうことが多いかなと思えます。しかし、
友達が私に注意してくれたことがとても印
象に残っています。

中学二年生の冬、中学校生活も二年目で
様子も分かるようになり、私はその「慣れ」
が悪い方向に向き始めてしまっていました。
部活が段々と面倒になり、予定がない時で
も早退や欠席をする日が増えていきました。
先生には学年集会で「慣れ」が「狎れ」に
ならないように、と言われていましたが自
分でセーブできませんでした。欠席のしず
ぎを自覚してなんとかしなければと思っ
ていた時、友達からラインが届きました。そ
こには「明日は絶対来て！」と書かれてい
ました。私はそれを見て、自分は友達にこ
んなことを言われるほどひどかったのだな
と改めて自覚しました。その子はとても仲
が良い子というわけでもなかったのですが、いっ
そう効果がありました。私はその子にとて
も感謝しています。もし、ラインを送って
くれていなかったら、私はその後も部活を
休み続けていたかもしれませぬ。メッセー
ジのおかげで喝が入り、部活にもすっかり
行くようになりました。私は弦楽部に所属
しているので、今は中等部最高学年として、
パート練習で後輩に教えることをがんばっ

ています。これができているのも、あの時
友達がメッセージを送ってくれたからだ
と思えます。ありがとうと伝えておきます。
このコンクールに応募しよう決めて、
親切と考えた時に、私は最初にこのことが
思い浮かびました。人に注意することを親切
として書いて良いのだろうか少し迷いま
したが、私の中でこの出来事はしっかり親
切として残っています。確かに考えてみれば、
パート練習で後輩に間違いを指摘すること
も、一種の親切かなと思えます。このように、
人に注意することも、後でその人のため
になっているのなら、親切といえるのだな
ということを最近気づかされました。私は今
まで親切イコールやさしいというイメージ
でしたが、やさしいだけが親切ではないの
かもしれないと思えました。

私の心のライト

静岡県立浜松西高等学校 中等部 三年

石村 雫月

一週間前、私は小学校の頃の友達と二人で町内の夏祭りに遊びに来ていた。夏祭りは近所の小学生や中学生など多くの人でにぎわっていた。

しかし、私は地元の中学校の子たちの姿がたくさん見え始めると同時に、不安を抱え始めていた。私は地元の中学校ではなく、中学受験をし中高一貫校に通っている。そのため、長い間会っておらず、久しぶりの再会となる子たちが多く、緊張していた。また、地元の中学校は私の通っていた小学校ともう一つの近所の小学校出身の子が合わさっている。当然、夏祭りにはもう一つの近所の小学校出身の子たちも多くいて、もともと人見知りな性格の私はさらに緊張をつのらせていた。すると、自然と地元の中学校の子たちが集まり、私と一緒に祭りに来た友達もその輪の中へ入ってしまい、私は孤立状態となった。

少し時間が経つと、地元の中学校の子たちの中で隣の夏祭りへ移動するという話が出た。私も「一緒に行かない？」と誘われたが、孤立状態は続くだろうと思っただけで、慣れない人たちと一緒にいることで少し疲れもたまってきたのでその誘いは断った。私と一緒に夏祭りに来ていた友達は「隣の夏祭りへ行く」と言ったので、その友達とはそこで別れた。

しかし、別れてすぐにその友達は走って戻ってきた。「どうしたの」と聞くと、

「ごめん、もし私が雫月の立場だったら、どうして私と来たのにそっちに行くのって絶対怒るから戻ってきた。」

と言った。私はそう言われたとき、少し驚いたがじわじわと胸が温かくなるのを感じた。私自身、その友達に対し怒りは感じていなかったが、ずっと独りで寂しかったのは事実だったので私と一緒にいるために戻ってきてくれたことが素直に嬉しかった。その友達の行動は私の浮かぬ表情を一瞬で心からの幸せな笑みに変えてくれた。その日初めてしっかりとその友達と向

き合えたような気もした。また、私はそのとき単純にその友達のことをすごいと思った。相手の気持ちに気づき、すぐに行動に移し、素直に謝ることは誰でもできることではない。常に一度立ち止まり、相手のことを相手の立場から考え、気遣っているからこそできる行動だと思う。私はこの友達のおかげで悪い思い出にならなっていた夏祭りを最高の思い出に変えられただけでなく、新たなことを学ぶことができた。私はたまに「この子は今こう思っているかもしれない」と思っても、自分を優先してしまったり、勇気を出せなかったりして行動に移せないことがある。しかし、これからは私の心を明るく照らしてくれた素敵な体験を思い出して相手を思いやり、ためらわずすぐに行動に移せるような人物になりたいと思う。



入選

経験からつくる心のワクチン

静岡県立浜松西高等学校 中部部 一年

稲勝 大地

私の考える心のワクチンとは、心の経験です。

ワクチンという言葉を聞くようになったのは、コロナウイルスが蔓延した時期からだと思います。今はコロナウイルスに対するワクチンができ、国民の多くがワクチンを接種しています。そのおかげでコロナウイルス感染を食い止めることができています。私は、ワクチンの重要性を感じています。しかし、私はワクチンがどのようなものかをしつかりと理解していませんでした。そこで、ワクチンとは何かを調べてみました。調べた結果、ワクチンとは病原体を弱くしたものを体内に入れることで、その病原体に対する抗体をつくり病気が重くなることを予防するものと分かりました。

ワクチンとは何かを理解したところで、

私は心のワクチンとは何かを考えました。その結果、心のワクチンとは自分が辛かったことを経験として、相手に同じことをしないことという答えができました。そして、相手が喜ぶことを考え、行動できる力をつけることも大切だと思います。例えば、挨拶です。私は、小学校の時に挨拶運動をやっていました。ある日、私が挨拶すると笑顔で挨拶を返してくれる子がいて、私はとても元気ができました。別の日に挨拶をすると、無視されてしまい、とても暗い気持ちになりました。私は、この経験を活かし、挨拶をされたら無視をせず、笑顔で大きな声で挨拶するようになりました。

小さいころに、自分がされて嫌なことは相手にしてはいけないという言葉をよく聞きました。相手が嫌にならないためには、相手の気持ちを知ることが一番だと思います。そのため、自分がされたときの気持ちを考えなければいけません。つまり、自分の経験を思い返すことが大切だと思います。これらは、自分がされた時の気持ちと、相手はどんな思いをもって自分に接したの

かを考えると深い経験になります。そして、これらのことをすると、心のワクチンをつくるができると思います。

経験を振り返ると、自分が嬉しかったことが明らかになります。自分の嬉しかった経験を次は相手に対して行っていきます。その行動が広がっていくと、世の中に親切の心が育まれていくと思います。

最近、コロナウイルスが五類の分類となり少しずつ日常の生活が戻ってきました。しかし、その裏では仕事を失った人、後遺症で苦しむ人など心が疲れている人もまだ多いと思います。そんな時だからこそ、みんなが心のワクチンを意識することが大切だと思います。相手のことを思い行動することで、心のワクチンを広げていく。そうすることで、もっといい世の中になると思います。

本当に親切にするべき人は家族。

富士宮市立富士宮第三中学校 三年

遠藤 百々羽

水中メガネをしながら玉ねぎを切っているときにふと、他人や友達にもそうだが、家族にも親切にしないとと思った。とにかく目が痛い。なぜ母と父はいつも涙も流さずに玉ねぎを切ることが出来るのか気になる。この質問を両親にぶつけてみれば、

「慣れですね。」

の一言が返ってくる。では、自分は玉ねぎを切り始めて何年経つのか。たったの数年ではないか。まだまだ両親には及ばない。

とにかく、家族にも親切心を持たないといけないと改めて思ったが、どうやって親切にするのが問題だ。

毎日、朝昼晩とご飯を作るのか。ハッキリ言っただけは無理だ。玉ねぎごときでヒーヒー言っている奴が出来るはずがない。いや、練習すれば出来るかもしれないが、今の自分には無理だ。出来れば料理で

はなくゲームをしたいという自分の欲望へと逃げるはずだ。

なら料理ではなく食器洗いはどうか。恐らく、というかほぼ百パーセント三日坊主で幕を閉じることになるだろう。理由としては、「めんどくさい」からだ。その「めんどくさい」を毎日、無休でやっている母は「すごい」なんて言葉で表せないくらいすごい。自分からしたらもう、母は神の領域内に入っている。主婦をバカにしてはいけない、絶対。

結局、家事を「手伝う」という認識で手伝わたら主婦にとってはなんの足しにもならない。むしろご迷惑をおかけする。だったら、部屋をきれいに保つのか、洗濯機に洋服を入れる時にポケットにティッシュなどが入っていないか確認してから入れるのか、ご飯を食べた後はお茶碗やお皿に水を入れて浸しておくのか。どれも親切とは少し違う気がする。

そもそも家族への親切とは何だろうか。優しくするのか。逆にこちら側が優しくされる側なのでお互い様になってしまう。

では親孝行か。この前、

「元気に育ってくればそれが親孝行ですな。」

と言われたばかりだ。どうやら自分はもう親孝行しているらしい。どうしたものか。

家族に親切にできないなら、どうして他人に親切にできるのだろうか。恐らく、家族は「やってもらうのが当たり前」「やってくれるのが当たり前」とそれぞれが無意識に思ってしまったからだ。でも、感謝はできるのではないか。家族への親切は「感謝」ではないかと思っている。家族への感謝を忘れずに日々生活を送ることが出来れば良いのだろうか。

結論、他人への親切に目が行きがちだが、家族への親切は、他人ではない「家族」という言葉に縛られて親切にするという機会があまりないので、家族に親切にするのは難しい。が、家族に感謝するというのは簡単にできるだろうと、玉ねぎと格闘しながら思った。



入選

変わらない親切に、ありがとう

裾野市立富岡中学校 三年

太田 結月

毎年お盆やお正月に会いに行っても、いつも通り元気で、和やかな雰囲気を持つ祖父。毎回会うたびに、私まで元気になる。しかし、今は筋萎縮性側索硬化症という難病を患っている。それが発覚したときから、祖父は前とは変わってしまった気がした。前の和やかな雰囲気は、今では無機質に見える、前の元気な姿は、病気の恐怖に怯えているかのような、悲しそうな姿に感じた。同じ病気の方の生活が紹介されていたテレビ番組を見ていたときも、

「いつかこういう症状が出るのかな。」

「将来の自分が想像できないな。」

と、祖父の一つ一つの発言が弱々しく、辛かった。

祖父は病気が進行して食事が難しくなるとき、直接胃に栄養を送れるようにするための、胃ろうの手術を受けた。その後病

院に会いに行った。今の調子はどうか。病気は進行しているのか。これからどういう計画で治療していくのか。そんな話をしていたが、私の頭には何も入らず、もう私が幼かった頃の祖父には戻れない現実に対して、やるせない気持ちでいっぱいだった。その後も色々な話をして帰るとき、祖父は言った。

「帰る前に、いっぱいおいしいものを食べてき。」

いつも祖父は私たちが祖父の家へ行くとき、外食にしたり、出前を取ったりしてくれて、うれしかった。そのうえ、私が用事で行けなかったときも、お土産に鰻のお弁当を買ってくれたこともある。そのとき初めて食べた鰻は、私には勿体ないくらいおいしくて、忘れられない。祖父にとってはいつもの小さな親切なのかもしれない。しかし、私にとっては小さくなんかない。前の祖父を思い出させてくれた。元気なときも、病気のときも、私たちを大切にしてくれていた。祖父の病気はゆっくり進行していく。身体はもう前のようにには戻れない。

しかし、私たちを大切にしてくれた心は、ずっと変わらない。「いっぱい食べてき。」この言葉を聞くたびに、今も祖父が生きていること、優しくしてくれていることへの感謝の気持ちであふれる。

毎年、今年も祖父の家へ行けるという安心感が心の中にあつた。しかし、祖父が病気になってから、その安心はなくなった。毎回行くたびに、（今は大丈夫かな。）（病状はどうなっているだろう。）と不安になり、祖父の弱っている姿を見て、悲しくなっていた。そして、祖父が元気でいてくれることが、安心という名の私の心のワクチンになっていたことに、ようやく気づいた。たくさん打ってくれたワクチンを胸に、自分が今たくさんさんの親切で支えられているように、私も誰かを支えられるような人になっていたい。「安心」で守られている生活を、未来につなぐために。

小さな言葉と小さな想い

静岡県立浜松西高等学校 中等部 一年

河村 妃菜

「頑張つて。」

この言葉を誰かにかけてたことはあるだろうか。きっとその人のことを応援する時に使った言葉だろう。私はこの言葉に何か違和感を感じていた。

中学に入学して一年目となった去年、私はとある珠算の大会に出た。その日が近づくにつれ、周りの人から受けとった言葉。それは「頑張つて」だった。けれど、私はふと思つた。これは誰かを応援するための温かい言葉だけれど、受けとる人によっては辛い言葉になるのでは、と。これは私一人が感じただけの独り言だ。しかし、ある友達からかけられた言葉を聞いた時、きっとこれは私だけの感情ではないと感じた。その言葉は「応援してる」だった。たった一言。その一言が、私の中にあつた何かすらも分からないその感情を確かに動かした。どちらも同じ「応援」

する言葉なのに、なぜ感じ方が変わったのか。私は考えてみた。「頑張つて」という言葉は、相手を応援する言葉として最もよく使われ、誰でも気軽に使いやすい言葉のように感じる。また、「よし！もつと頑張ろう！」とさらにやる気になれる人もいるだろう。しかし、この言葉は悪く言つてしまえば「頑張つていない人」にかける言葉で、もうこれ以上頑張れないくらいに頑張っている人にはとても辛い言葉だ。そんな状況に陥っている人にはきつと「もう十分頑張つてるのにこれ以上どうすればいい？」とさらに追い詰められる言葉になる。しかし、勘違いしないでほしいのは、私が言いたいのは「頑張つて」が悪く、「応援してる」がいいというわけではなく、言葉は相手の大きな力になるということだ。たった一瞬の言葉に何ができるのか。応援してもその人の実力がいきなり伸びるわけでもないし、何の役にも立たない。声になつては空気に溶けて消えるだけ。けれど、確かに、言葉には応援するための力がある。「応援」この言葉には「力を添えて助ける」という意味がある。力を添える

といつても、運営など物理的なものではなく、精神的に支えることだ。私たちの毎日は誰かの言葉で成り立っている。見知らぬ人に「ありがとう」と感謝の言葉をもらうことで優しい心になれる。好きな人に「おはよう」と挨拶してもらえただけで一日が楽しくなる。ほんの一言を耳にする度、私たちは何かが変わる。ただの言葉では何も大きく変わらない。どれだけ声をあげても、毎日少しずつ消える命は救えない。けれど、どんなに小さな事でも誰かを支えることはできる。何よりも大切なのは「こういう時にこう言つた方がいい」と言葉をマニュアル化せず、相手を見て、その時に相手が言つて欲しい言葉をかけること。そんな簡単なことではないけれど、一つ一つの小さな言葉に、小さな思いを込めて、みんなが会話をできたなら、その世界はとても優しいものになるだろう。



入選

「人の心は無量大」

浜松日体中学校 二年

菊池 藍衣利

去年の秋のこと。部活中の事故で頭部外傷を負ってしまった。頭痛がする上、足に力が入らず上手く歩けなくなってしまった。学校生活は大変で、移動教室も多々あった。そんな時、手を差し伸べてくれたのは、友達だった。教室移動がある度に、一人は荷物を持ってくれ、もう一人は肩を貸してくれて。本当に嬉しかった。本当に有難かった。当たり前のように助けてくれた友達の存在は計り知れない。「ありがとう。」心の底からの気持ちを伝えた。私は、この友達からの支えを決して忘れてはならない。

事故から一週間後、頭痛はまだ残っていたが、序々に足に力が入る様になり、手すりなしで歩けるまでに回復した。それでも友達は前と変わらず、とても心配してくれていた。私はとても嬉しかった。なぜなら、頭痛は外から見ても分かるものではない

から、人にはこの痛みを分かってもらえるわけがない、と思っていたからだ。頭痛の時は、話しかけられても話したくない時もあるし、楽しみたいくても楽しめないこともある、友達に嫌な思いをさせてしまっていないか、友達が嫌な思いをさせてしまっていないか、気がかりだった。だからこそ、「大丈夫？」や「少しは良くなってきてる？」などの私を心配してくれ、気にかけてくれている言葉や、支えてくれる行動が、この上なく嬉しかった。

頭痛を抑える薬を毎日飲んでいる。それでも抑えられないことが多く、痛み止めの薬も処方された。「痛くなったら我慢しないで早く飲んで。」と医師に言われたが、学校、それも授業中だとなかなか難しい。それを伝えると「先生が、学校の先生に授業中でも飲ませてほしいと手紙を書くこともできるよ。」と言ってくれました。どうせ薬を飲んでも治らない……。投げ出したくなりそうだった私の気持ちが、この医師の温かい言葉で救われた気がした。

さらに、体育の柔道の授業中。武道場で立って見学をしていたが、段々と気持ち

悪くなってしまった。二人いらっしやる先生のうち、私の近くにいた一人の先生が、そんな私に気付き、武道場の外に椅子を置いてくださった。畳で上靴を脱いでいたため、上靴も探して持ってきてくださった。その先生の思いやりにより、少し体調も良くなった気がした。

ある冬の日、あの時肩を貸してくれた友達から、こんな言葉を掛けられた。

「中二になるまでに治してよ。じゃなきゃ楽しくないじゃん。」

私の心にグツときた。涙が出そうな程嬉しかった。事故の直後は辛かった。何でこんな思いをしないといけないの？治らないじゃん！ずっと頭痛が続いたらどうしよう。不安も大きかった。そんな日々を乗り越えられたのも、自然と支えてくれる友達があったから。温かい言葉を掛けてくださった医師や行動してくださった先生がいてくださったから。人は一人では生きていけない。この経験を生かし、いつも思いやりの心を持ち、生きていきたい。

「次は私の番」

静岡市立清水第五中学校 二年

小林 芽生

私がバスに乗っていたときのこと。私は卓球部に所属している。私は今日試合があった。ふだんはメガネをかけているがその日は汗で前が見えなかったためメガネをはずしていた。

私は部活の試合帰りにバスに乗った。私がバスに乗るときは席がほぼうまっていて一番後ろの席しかあいていなかった。一番後ろに座った私は運賃表が見えなかった。私はお金を両がえししなければならないことは分かっていたのでバスが止まった時に両がえしに行きそのまま運賃表を見に行った。そのとき、

「降りますか。」

と運転手さんに声をかけられました。私は、「いえ。」

と言って席に戻った。結局運賃は出発するまで表示されず見えなかった。

しかし、バスに乗っているお客さんの事を考えるとすぐに戻るのが正解だと思っ

た。私が降りるとき、運賃が見えなかったためお金をすぐに出す事が出来なかった。運転手さんの顔からは、

「早くして。」

と言われたような表情が読み取れた。他のお客さんからも読み取れた。私は、

「すみません。」

と、言っ

て降りた。私はバスが出発する時にお客さんの顔を見てえしゃくしていた。そのときだった。私にはありえないと思っ

た。バスの中でスマホを窓に押しあてている一人の女性がいた。そこには、

「私は嫌な気持ちになっていないよ。気を付けて帰ってネ。」

と書かれていた。私は帰り道のたった五分の歩

きで涙がながれた。私はとってもうれしかった。私の足はいつのまにかどんどん

どんどん速まって、気づいたら家で試合の事よりも先にバスでの出来事を母に話していた。母のやさしく笑った顔を見てはっ

とした。私は、母が笑いながら、「あはは。きつと一番うれしかったんだね。お姉さんはきつと芽生の気持ちを考え

てやってくれた行動だね。今度は芽生が誰かに親切にする番だね。」

と言ってくれてうれしくなった。そこで私は元気よく、

「うん。」

と返事をした。数年たった今、私はそのときの気持ちを忘れた事は一回も一瞬もない。そして今でも、

「次は私の番。」

とまちどおしい日々がつづいている。



助け合いの心

学校法人磐田東学園磐田東中学校 一年

櫻井 舞花

私の両親は二人とも仕事が大変で、いつも忙しく働いています。以前は、私の体調が悪い時でも看病のために休みにくい状況でした。私自身も学校で調子が悪くなり、両親に迎えに来てもらうことは、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。両親が帰ることができないのなら我慢しようと思ったこともありました。私が風邪をひくと、仕事と看病を両立させないといけないと、余裕がない時もありました。本当は、体調が悪い時にはゆっくりとそばにいて欲しかったです。

でも、新型コロナウイルスが流行り始め、少しでも調子が悪ければ休まなくてはいけない状況になりました。学校や両親の職場でも流行り始め、休む人も増えていました。私も新型コロナウイルスに感染してしまい、学校を休まなくてはいけなくなりまし

た。その時、いつもだったら休みにくかった両親も仕事を休み、看病をしてくれました。普段にはない余裕のある時間を家族と過ごせて、私は嬉しく感じました。コロナ禍では、身近な人が感染すると、接触していた人も休まなくてはいけなくなり、家庭で看病できる状況になっていき、調子が悪い時でも安心して過ごせるようになりました。でも、休みの期間が終わった後、両親の帰りが遅くなることが多くありました。なぜかと聞くと、職場で休んでいる人がいて、その分の仕事をやっているということでした。働いている人が休むということは、その人の分の仕事を誰かがやらなくてはいけないのです。私の看病のために両親が休んだ時、同じ職場の人たちはいつもより多く仕事をすることになり大変だったということに気付きました。両親の職場の人たちが、思いやりの心で両親の分の仕事をしてくれていたと思うと、感謝しかありませんでした。両親は、「自分たちもやってもらったのだから、今度は自分たちがやる番だ。」と言っていました。私はその言葉を聞いて、

困った時はお互い様だからと、助け合うことの大切さに気付きました。

私は今まで学校で誰かが休んでしまい、その人の分の仕事をしなくてはいけないようになったときに、大変だと思ってしまいう時がありました。けれども、私が休んでいる間のクラス行事の時に、友達が私の担当を分担してやってくれました。友達は笑顔で私たちがやるから大丈夫と言ってくれて、とても嬉しかったです。なので、私が学校に行けるようになったときは「私がやるよ。」という気持ちで、休んだ人の分も積極的に行動するようにしました。誰かが休んだ時に、その人を責めるのではなく、「私がやるから大丈夫。」そういう言葉を心から言える人になりたいと思いました。

困った時はお互い様、相手の立場を考え、自分が同じ立場になった時のことを考え、これからもみんなで感謝し合いながら、助け合っていく。それが私の心のワクチンです。

本当の親切とは行動である

磐田市立城山中学校 三年

杉山 拓海

「カーカー」

カラスが地域のゴミ置き場を荒らし、そこら中にゴミが散乱している。「またか」と僕は思っていた。

僕たちの地域には、あるゴミ置き場があった。そのゴミ置き場には、ゴミが置かれるたびに、カラスがやってきて格子の間からくちばしを使って、ゴミ袋を破っている。そのせいで、僕たちの地域のゴミ置き場はだいたいゴミが散乱していた。

そんなことが毎日のように続き、困っていたある日、見慣れない男性が散乱したゴミの前に立ち、なにか考えているようだった。おそらく、最近この地域に引っ越してきたのだろう。今までにもこの男性のように、引っ越してきて一番初めにこの状況を目の当たりにすると何か感じているような人は数人いた。しかし、次の日からは「い

つものことだ」と思ったのか、驚くこともせず何も感じなくなっている様子だった。僕を含めて、前々からこの地域に住む人たちも同様だった。その男性の行動もその日まではみんなと同じだった。そう、その日までは。

次の日の午後、その男性はネットなどを持参してゴミ置き場の前に来ていた。何をするかと見ていたら、ゴミ置き場の格子の間にネットを張り始めたではないか。丁寧に、丁寧に張っていく。カラスによるゴミの散乱を防ぐために張ったのだと思うが、かつてこの状況を見て対策のために行動に移した人は誰一人いなかった。それをこの男性は今やっているのだ。それから約三時間後、全ての格子の間にネットを張り終え、満足した顔で帰っていった。あの男性が初日にゴミ置き場の状況を見たとき感じたことは、この地域に住む人達と同じだったと思う。しかし、その後の行動が他の人たちとは全く違った。おそらく、他の人達も行動に移そうとは思っていたのであろう。しかし、今までの人たちは行動に移

そうと「思った」だけで、移しはしなかった。それをあの男性はやったのだ。あの男性はどのような考えから行動に移したのだろうか。次に男性を見かけた日、その男性に聞いてみることにした。あのゴミ置き場の状況を見てから、今日の行動までの気持ちを。

いつものように学校から帰る途中だった。すると、あの男性が、ネットを張ったことでカラスに荒らされなくなりきれいになったゴミ置き場にゴミを置き、戻っているところだった。そこで、僕はどのような気持ちであの行動をしたのか聞いてみた。

すると、その男性は、「人のために行動することに理由はいらないんじゃないかな?」と言った。その言葉は今でも、僕の脳裏に焼き付いている。



入選

親切の続き

長泉町立長泉中学校 一年

鈴木 いろは

私は、中学生になって吹奏楽部に入った。音楽が好きだったし、何か楽器を演奏してみたいと思ったからだ。

一年生の楽器が決まり、私はホルンパートになった。ホルンは仮入部の時に少しやっただけなので、私は何も分からずただぼーっとしていた。すると、同じホルンパートの三年の先輩が近くにきて、楽器の準備や吹き方などを優しく教えてくれた。質問をすると、そのことについてもくわしく教えてくれて、私は嬉しかった。楽器のことだけでなく、他のことについてもいろいろ先輩と話すことができて楽しかった。

また、同じホルンパートの二年の先輩は、音階の指番号や合奏でやることなどについてを、私のために書いてくれたのだ。さらに、譜読みをいっしょにしてくれたり、初めての合奏の時に、

「分からないところある？」

と聞いてくれたりしてくれたのだ。私は音楽は好きだが、ピアノなどを習っていない音符があまり読めなかったり、初合奏の時には全てのことからなかったりしていたので、困っていた。そこに先輩が来て、譜読みの仕方などいろいろなことを教えてくれた。私は困っているときに先輩が教えてくれて、すごく助かったしすごく嬉しかった。

このような先輩たちからの親切に、私はすごく感謝している。三年の先輩に教えてもらえなければ、基本的なことが分からず今でも楽器が何も吹けていなく、楽器の知識も何もなくだったと思う。二年の先輩にも教えてもらえなければ、音階が分からなかったり、合奏でやることが分からなかったり、何よりも譜読みができなかったと思う。

先輩たちからの親切を受けて、私は改めて人に親切にすることは大切だと感じた。そして、分からないことがあったらすぐにだれかに聞くことも大事だと思った。先輩たちが私にしてくれた親切を、私も困っているだけか

にしてあげたいし、喜んでほしい。そして私が親切にしただけだが、また他のだれかに親切にできたら良いと思う。そうすればみんなが笑顔になれると私は思った。

そして私は、先輩から楽器のことなどのいろいろなことを教えてもらった。そうしたら次は私が、先輩に優しく教えてあげる番だ、そう思った。来年になったら後輩が入ってくるから、その時には私がいろいろなことを教えてあげたい。先輩たちが私にしてくれたように、私も後輩に親切にする。その後輩の後輩に親切にする、この親切がずっと続いていくと良いなと私は思う。



小さな親切

森町立旭が丘中学校 一年

鈴木 大和

小学校六年生の時の冬休み、ぼくのお母さんが倒れて入院し、しばらく帰ってこれませんでした。それから何度か入院して検査をしたけれど、結局不治の病の難病になってしまいました。

その頃の僕には、突然の事で何が起きているのか、どれだけ大変な事なのか、よく分かりませんでした。ただ、お母さんの体がしんどそうなのが分かりました。それでも僕は、何をしたら良いのか分からなかったし、お母さんも何かしては言っていました。そんな中でも、卒業式、入学式、参観会や奉仕作業に、長時間歩いたらしんどいのに、必ず来てくれました。

ある日お母さんが僕に、地区の草刈りに代わりに出てほしいと頼んできました。お母さんが病気になってから、初めて僕に言ってきた頼み事でした。今までの自分な

ら、だるくていやだと思っていたはずなのに、その時は全くいやではありませんでした。地区の大人の友達にすごくほめられて、何よりお母さんがものすごく喜んでくれました。この時、人に喜んでもらえる事がこんなにも気持ちが良いのか、と思いました。それから僕は、自分でも出来る事は進んでやるようにしました。それはすごく小さな事です。夕方になったらカーテンを閉める。お母さんが洗濯物をたたみ出したら一緒にたたむ。そんな小さな事でも、やってみたらすごく喜んでくれます。そこから、出来る事を増やしました。お風呂掃除や食器洗い。お母さんは毎回ありがとうと言ってくれます。だから僕も、僕のためにしてくれた事に対して、毎回ありがとうという言葉になりました。

僕は元々人見知りするところがあった、初対面の人と話すのは、きん張ります。けれど、家での経験を元に、何か出来る事があればと思い、ボランティアに参加するようになりました。最初はきん張したけれど、友達もいたおかげで楽しく参加出来まし

た。この事をきっかけに、夏休みに「中高生ボランティア体験入門講座」を二十時間受講しました。心得や手話や点字など、色々な事を学びました。勇気を出して参加して、本当に良かったです。

僕がここまで行動出来るようになったきっかけは、お母さんの病気だったと思います。きっかけは悲しい事かもしれないけれど、小さな事でも人のためにする事は、相手も喜んでくれるし自分もうれしい気持ちになります。今ボランティアに参加したり色々々と学んでいる最中で、実際にその場になったら行動出来るか、正直まだ不安です。でも今の僕には、家族や友達など大切な人はたくさんいるので、まずは身近にいる人達に親切に、困っていたら声を掛けたり手伝ったり、勇気を出して行動して行きたいと思います。今回この作文を書く事でも思ったのは、小さな親切は大きな勇気だという事です。



入選

退屈は人生の毒

磐田市立城山中学校 三年

田中 颯

僕はアニメが好きだ。アニメの世界は好きなキャラクターがいるうえ、現実よりも刺激的だ。特に好きなのはキャラが言うかっこいい名言。名言を忘れないように、僕はよくメモしている。そんなことは置いといて、アニメの世界は僕にとって理想の世界だ。僕はそんなアニメの世界を夢見て、困っている人がいたら進んで助けてあげようとする中で決めていた。

友人と電車で遠出する日だった。僕が席に座っていたら近くにお年寄りの方が乗ってきた。電車の席は満席で優先席に座っている人も立とうとしない。人助けなんて簡単なものだと思うのだがいざ困っている人を前にすると自分から動くことができない。「誰かが動いたらやろう」とか、結局人に押し付けてしまうのだ。どうすれば良いのかなんて考えていた時、アニメが頭の

中に浮かんだ。僕の体は自然と動き、勇気を振り絞ってこう言った。

「席譲りましょうか。」

「年寄りでもなんでもないので結構です。」

そう、よく見たらその人はお年寄りではなかったのだ。失礼なことをしたなと思っただが、何も言うことができなかった。そしてぼかんとしながら電車を降りた。すると、近くに座っていたであろうサラリーマンが、持っていた缶コーヒーを僕にくれて、こう言ってきた。

「それ開けてないよ、その勇気忘れねどね。」

コーヒーは本当に苦手だけど気持ちだけで嬉しかった。そして、勇気を出して良かったと思えた。乗り換えた電車で揺られながら、あのことを思い出す。結果的に話しかけてよかったと思えたけど、あのサラリーマンがいなければただの恥ずかしい思い出だったと思うと、親切が報われるとは限らないな。なんて考えながらコーヒーを一口。ブラックコーヒーだ。これだけは本当に無

理だ。苦みのせいでさっき起こったことなご考えられなかった。

あの日以来「親切」という言葉を聞くにあの思い出が蘇る。そして親切にすることの意味について深く考える。この文を書き、僕が人助けしようと思ったのはアニメのよくな刺激を夢見ていたからということが分かった。あの思い出はまるでアニメのような話で、本当にいい刺激だったと思う。それでいいじゃないか。僕の読んでいる本に「期待しないほうが楽だが、退屈は人生の毒」という言葉があった。まさにその通りだと思う。助けてあげれば、出会いがあったり、何かもらえたりするかもしれない、なんて気軽な気持ちで過ごせば人生はよっぽど楽しい。「退屈は人生の毒」僕はそうメモをとった。

受け取る人の優しさ

静岡市立清水第五中学校 二年

西牧 慶叶

今年の五月、僕は地元のスーパーで職場体験をした。まず初日は、体験先の雰囲気慣れながら多くのことを学んだ。そして二日目、この日は初日に教えてもらったことをしっかりと頭に入れながら飲み物の賞味期限の古いものから前へ持ってきていた。すると突然後ろから「お、がんばってる。」という声が聞こえてきた。なにか聞き覚えのある声だと思い振り返ると、他の体験先へ行っていた友達三人が少し笑顔をかべながら立っていた。どうやら三人はもうこの日の職場体験が終わったから僕の仕事の様子を見に来てくれたらしい。僕はなんだかうれしくなった。その三人の職場体験先からこのスーパーがその三人の家と逆方向なのにわざわざ来てくれたのだからなおさらだ。しかし、三人は僕の目の前の飲み物を手に取り、「じゃあ遊びに行ってくる

わ。」と言いスーパーから出ていってしまつた。その時の僕は少し前のうれしい気持ちから一転し、ただそれを言いに来ただけかと多少暗い気持ちになったと同時にその三人の印象も少し悪くなった。三日目の翌日、この日は最終日だった。最終日くらいは楽しくやろうと思ひ、昨日あった出来事を忘れていた。この日は、店長さんが「残り一時間になったらレジを任せるね。」と言っていた。僕は昔からレジをやってみたいと思っていたので楽しみにしながら他の仕事をしていた。しかし、実際は商品を読み込みながらお客様へ言葉をかけるのが難しく、なかなか上手くできずに落ち込んでいた。隣で一緒にレジをしていた友達とはげまし合いながらがんばっていた。そして、あと少しで職場体験も終わるといふ時、昨日の三人が僕のレジに並んでいた。しかし、この日も三人は笑みをうかべていて、昨日のことを反省している様子は全くなかった。その三人の手元を見ると僕の大好物のお菓子を一人一つずつ持って並んでいた。また僕を馬鹿にしに来たんだと確信

し、僕は腹を立たせていた。その友達の順番がまわってくると僕は冷たい態度で対応をしていた。僕はその大好物のお菓子については何も聞かなかった。しかし、三人目の友達の対応を終えると、三人で声を合わせて「これ、ご褒美。」と笑顔で渡してきた。更にそのすぐ後に一人が「店の外で待つところから、一緒に帰ろ。」と言ってきた。僕は心が驚きと喜びでいっぱいになりながら「ありがとう。」と三人にしか聞こえないくらい小さな声で言った。今思うと、わざわざ僕のことを見に来てくれたのは感謝するべきなのに勝手に一人で怒っていた自分は最低だ。そしてこんなに優しい友達を絶対に大切にしようと思った。こんな最高の優しさに気付けなかった僕には優しさが足りなかった。思いやりとは、思いやりの気持ちを与える人の優しさではなく、受け取る人の優しさがあつてこそ、成立するものだと思う。



入選

後悔が生んだ親切の種

静岡県立浜松西高等学校 中等部 三年

袴田 直志

私達の身の回りは、小さな親切で溢れている。ただそれに気づいていないだけで気づこうと思えば何個でも探すことができると思う。そして、皆が一つでも気づいていけば社会は豊かになっていく。小さな親切とはそういうものだと思ふ。

去年の冬、私はいつものように学校に行くためにバス停でバスを待っていた時だった。自分の前にお爺さんがバスを待っていたが、様子がおかしかった。何か言いながら周りを見渡していた。耳を澄ましてみるとお婆さんを探しているようだった。自分は気になりながらも声をかけることができず、そのままバスに乗ってしまった。結局そのままお爺さんはお婆さんを見つけることができずバスに乗ることができなかった。私はそのことがずっと頭に残って後悔していた。それから後悔するなら自

分が気づいたことは何でもやるようにすることにした。通学路に捨てられていたごみも気づいたものはゴミ箱に捨てるようにしたり、バスや電車で老人の方が乗ってきたら積極的に席を代わるようにしたりすることを心掛けた。そうすると段々褒めてもらえることも多くなった。実際席を譲ったお婆さんから「ありがとう。思ってもそれができる人はそういないよ。凄いな。」と褒めてもらったり、カラスに荒らされていたゴミ箱を同じバスに乗っていた友達とまじめたら、それを見た地元の人が学校に連絡して放送されたりしたこともあった。そして中学三年生になった今年。去年と似たようなシチュエーションになったことがあった。私は、去年のこともあってかなり焦って何もうまく考えることができていなかった。

しかし去年と同じように見てみぬふりをするれば、また後悔することになると思い声をかけた。そのお爺さんもお婆さんを探している、僕は必死にお婆さんを探した。結局、お婆さんは近くにいてすぐ見つかった

が、その後二人がこう言うてくれた。「ありがとう。」その時は改めて思った。あの時後悔していたことをやり直すことができよかったです。

最初は自分の反省から自己満足のために始めたことだったがそれがいつか自分のためだけでなく他の人の役に立っているということに気がつくことができた。私はこの経験からきっかけはどうであれ、人に親切にすることを意識して続けることでそれが習慣化してずっと続けることができるという風に気が付くことができた。これからは困っている人がいたら悩みたためらうことなく、咄嗟に体が動くような人になりたいと私は思う。

笑顔の大切さ

磐田市立神明中学校 一年

日内地 優里

私の母方の曾祖母が今年の五月に九十五歳で亡くなった。母から戦後の貧しい日本を我慢強くたくましく生きた人だったと聞いている。いつも笑顔で大きな笑い声、花と野菜を心から愛する心優しい人だった。みんな仏様のような心の広い人だったと話していた。私もそう感じている。お葬式での眠った顔は、本当にきれいだった。

私は、幼き頃からよく祖母や母に連れられて曾祖母の家に遊びに行っていた。曾祖母は、いつも日に焼けた大きな笑顔で尻尾を下げて、

「よく来たね、嬉しいよ。」

と言って、私を抱きしめてくれた。私は、照れくさかったけれど嬉しかった記憶が今でも覚えている。一緒に折り紙を折ったり、おもちゃで遊んだりすごく楽しかった。曾祖母は、俳句と菊づくりが趣味で菊の咲く

時期には、いつも玄関、庭中が菊だらけで一生懸命に育てた菊に囲まれている時の幸せそうな顔は忘れられない。曾祖母は、

「菊を近所の人達や通った人達にきれいだとはめられた。」

とにこにこしながら誇らしげに言っていた。先生にほめられた俳句は、必ず読んで聞かせてくれた。曾祖母の俳句は、今も私の家の玄関に飾られている。私達が帰る時は、毎回自分で作った野菜と花を持たせてくれた。よく近所の人達にも配っている採れたての野菜は、とても美味しい。私は、当たり前のように自然にできるこの親切にすごく優しさを感じた。そして、必ず私を見て、曾祖母は、

「もう帰るのかい、かわいいね、家においておきたいよ。」

曾祖母は、数年前から少しずつ認知症を発症し、記憶がうすれてしまう。私は、初めて人の記憶がなくなることの怖さを知った。悲しかった。そして、三年前体調をくずし入院した。退院時、先生が曾祖母は認

知症と医療行為が必要で自宅で介護はできませんと話があり施設に入ることになった。コロナ禍でも会える時は、会いに行けた。記憶はないが元気な顔を見て会話ができて嬉しかった。親しみをもった大きな笑顔が私達を分かっているように感じた。その後面会できず、対面できた時、母達は一生涯懸命に曾祖母の体を愛情込めてさすった。私は、小さい親切の積み重ねが深い愛情に代わっていることを感じた。

小さい親切は、心で感じるもの。自然にその行動ができる人は、素敵な人である。私も沢山もらった曾祖母の親切は、深く心に残り思い出とともに生きている。曾祖母の、笑顔は人を優しくする、笑い声は元気をくれる、この言葉を大切に生きていこうと思う。私の心のワクチンである。曾祖母のように、沢山の人に愛される人になりたいと思った。玄関に置いてある俳句を見るたびに優しい心、あたたかい心を思い出す。



入選

幸せが増えるために

静岡市立清水第五中学校 一年

平子 大誠

これは僕が、小学六年生の時の出来事だった。僕が友達と公園へ遊びに行こうと、歩道を歩いていたら、すると前から、つええ持った目の不自由な女性が歩いてきた。

その女性はスーパールの袋を持ち歩いていて、少し歩くのが大変そうだった。

僕は、大丈夫かな。と思いながら歩いてみると、何やら高校生が急いで走って、女性の横を通った直後に「邪魔なんだよ。」と舌打ちをしながら通っていった。女性はもうしわけなさそうに、「すみません。」と言った。僕はなんでそんな言葉を軽く言えるんだよと言いたかったが、僕にはそんな勇気はない。とても高校生に腹が立った。僕の祖父は、小さい時に交通事故で足を失なった。だから祖父は、車椅子で生活をしている。

僕は祖父が昔、話してくれた言葉を思い

出した。「おじいちゃんは、足が使えないけど、特別扱いされるのも嫌なんだよ。でも馬鹿にされたり、助けてほしい時に助けてもらえなかったりすると、とても悲しい気持ちになる。だから、そういう人が助けを求めていたら絶対に助けてあげてほしいんだよ。」という言葉思い出した。

そう思っていると、その女性が近くの公園に向かって行った。僕も公園で遊ぶためについて行った。

すると女性は何やらウロウロしていた。僕はベンチを探しているのだろうと思い、「大丈夫ですか。」と僕は言った。女性は「ベンチに座りたいんです。」と、申し訳無さそうに言った。「こっちですよ。」と案内すると、女性が「ありがとうございます。」と嬉しそうに言った。

その時、今まで僕は勇気が無く、人助けをする事が出来なかった。でも今僕は、確実に人助けをしている。この女性の役に立って本当に嬉しい気持ちになった。こういう行動をする事で、相手も嬉しい気持ちになれるし、自分も温かい気持ちになれると

実感した。そして、もし僕が何も行動しなければ絶対後悔しているだろうなとも思った。だから祖父の言っていた事が良く分かった。

この出来事があり僕は、常に周りを見て判断し、助けを求めている人を助けるようにしている。相手に意思を伝える時には、誰も不快にならないような言葉を使うようにしている。そして、悲しい気持ちになっている人を一人でも減らしたいと思って行動している。

祖父が教えてくれた言葉は、すごくありがたく思う。でも世界で、いじめをしたり、悲しい目にあう人はなくならないと思う。でも寄付をしたりと、人助けをする手段は、たくさんある。小さな事でも、人を助けるのは大事。だから僕は悲しい思いをする人が減る活動をあきらめないと心に決めた。

私の心のワクワク

御前崎市立浜岡中学校 一年

堀内 陽太

「おはよう。」「おはよう。」

「ありがとう。」「はいね。」

元気な声が返ってくるとほっとする。相手の返事でその人の心がわかる気がするから。そしてその返事で元気になったり、ちょっと気持ちがおちこんでしまう事がある。だから相手からのあいさつの声は僕の心のワクワクだと思う。

元気な声が返ってくると、あーよかったと思うし、返ってこなかったり小さな声だったりすると、どうしたのかな？何か気に入らないことしちゃったかな？と色々考え、昨日のこととかを思い出してみたりする。

僕は大きな声で答えることが苦手である。いつも大きな声で返事をしたり、質問しないと相手に聞こえないよと注意される。特に初めて会った人や、久しぶりに会

う人が相手だとなんとなくはずかしくて、声が出ない。それは、自分でも分かっているしもう少し大きな声で返事をすればよかったなという後悔する。

小学校の時、見守り隊のおじさんが横断歩道を渡る時「おはよう、いつてらっしゃい。」と声をかけてくれた。一年生のころは、はずかしくてお兄ちゃんたちについて小さな声で「おはようございます。」といていた。でも小六で、子供会の班長になると、一番先頭になって、下級生を連れていかなければならない。おじさんの近くに来ると、どきどきして声をだす準備をする。「おはようございます。」今日のあいさつは六十点だ、明日はがんばろうと思う。寒い日雨の日も僕たちのために立っていてくれるおじさんに、大きな声でお礼を言わなくちゃと心の中では思っている。

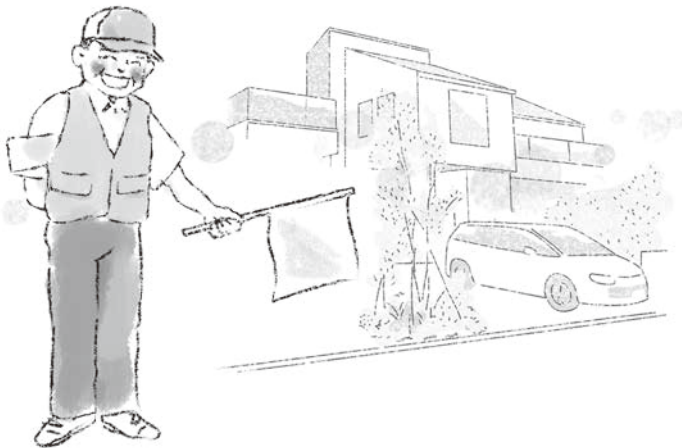
今日こそ、大きなあいさつしなきゃと集場所から気合いをいれて歩く。

「おはようございます。」

「はい、いつてらっしゃい。」

やった！今日は九十点いったかな。今

日一日、元気ががんばれるかもしれない。あいさつがぼくの心のワクワクだと思



今、あるべき姿に

富士宮市立大富士中学校 二年

深澤 颯来

「どうしたんだろう。」とある日の朝、私はいつもの通学路に異変を感じた。

昨夜は雨の日だった。だからいつもに増して重い足取りで学校に登校していた。しかしいつもの通学路とは何かが違ったのだ。なぜなら一箇所だけざわざわとした雰囲気をまとう場所があったから。少しのぞいてみると、そこには立てかけられた自転車と倒れた人がいた。驚いた私は目を見張った。あまりに突然のことだったし、こんな現場に遭遇したことなんてなかったから。大丈夫かな。どうしたらいいんだろう。一度学校に行った方がいいのかな？そんな不安が私の胸を覆い尽くしていた。しかし、そんな不安を打ち消すように周囲の大人たちはテキパキと動き出した。救急車を呼び、「大丈夫ですか、聞こえますかー？」と声をかけ、寒そうに倒れていた方に毛布を被

せた。

私は素晴らしいことだなと思った。

テキパキと行動していたことに対してだけではない。倒れている人を見て、即座に「なにかしよう」と思う行動力が生まれることに対してだ。一見誰にでもできそうだし、誰にでも生まれる感情だと思うだろう。

しかし、それは決して簡単なことではないと思うのだ。なぜなら、なにかしてあげようと思う対象者が自分の身内でも、親戚でもない赤の他人だから。ましてや朝の通勤時間。きつと、忙しい人で溢れていたと思う。それでも誰一人見てもみぬふりをせず、倒れている人に手を差し伸べていた。これが、今あるべき人の姿なのだと思う。

私はとある有名な人のブログを見たことがある。「倒れ込んでいる人がいるのにみんなが素通りだった。」「それに少し憤りをおぼえた。」そんなブログだった。そう、この世のみんなが手を差し伸べられるという訳ではない。手を差し伸べるにはそれなりの勇気がある。だからこそ、今回の出来

事見て、素晴らしいと思った。本当に素敵な街だな、そう思う。

私の夢は看護師になることだ。この出来事で、改めてなりたいたいと強く感じた。そして、手を差し伸べられる看護師になりたいとも。容易なことではない。ただ、相手を思いやる心があればきつとそんな人になれると思った。

思いもよらぬ、驚きの出来事だった。

しかし、その出来事に、私はいろんなことを気づかされた。今、あるべき姿、そして自分自身に必要なこと。私はいつかなりたい。

「大丈夫ですか。」と堂々と言える人に。

少子化が進む日本を救うために

静岡県立浜松西高等学校 中等部 一年

二村 圭亮

今、日本で深刻化している少子高齢化問題。二〇二二年の出生数は初めて八十万人を割り、このままでは増え続ける高齢者層を支えきれなくなってしまうと言われていきます。このような少子高齢化問題を解決するためには、政府の経済的な支援だけでなく、子どもや妊婦さんへの小さな気遣いも重要だと思います。

僕は小さな気遣いで心を動かされた経験があります。それは、僕が小学二年生で、タイに住んでいた時の出来事でした。バスに乗ったらとても混んでいて、席に座れずに立っている人がたくさんいました。僕も他の人と同じように立っていたら、見知らぬ人が声をかけて席をゆずってくれました。僕はそのとき、こんなに当たり前のように、知らない子どもに席をゆずってくれることに驚きました。自分だったら、他にも立って

いる人がいる中で知らない子どもに席をゆずることはできないと思います。しかも、席をゆずってくれた経験はこれだけではありません。次にバスに乗った時も、その次に乗った時も知らない人が席をゆずってくれました。たまたま親切な人が乗っていたわけではなく、必ず席をゆずってくれる人がいました。タイでは、子どもに優しくすることが当たり前になっていたのです。僕はとても感動しました。そして、僕も小さな気遣いが自然にできるようになりたいと思いました。

一方、日本では、子どもや妊婦さん自ら進んで席をゆずっている光景を見ることは、ほとんどありません。また、子どもの声がるるさいという理由で、公園を廃止してしまつたというニュースを最近聞きました。このように、日本は子どもや子どもを産む妊婦さんに優しくない社会になってきていると感じます。だから、子どもを産みたいと思う人が減り、少子化が進んでいるのだと思います。

この問題を解決するには、日本を子どもや妊婦さんに優しい国にしていく必要があ

ると思います。そのためには、タイの人々のように、子どもや妊婦さんへの気遣いが自然とできるようになることが大切です。しかし、最初からちゅうちょせず人に席をゆずることはとても難しいです。僕も知らない人に声をかけて席をゆずるのは勇気がいります。だから、最初は自然にできなくても良いので、まずは勇気を出して声をかけてみるのが大切です。そして、みんながそれを続ければ、子どもや妊婦さんにも優しい社会になっていくと思います。

少子化問題は、経済的な支援だけで解決できるような単純な問題ではないと思います。一人ひとりが真剣に受け止めて、子どもに優しい社会をつくっていく必要があります。みんなで小さな親切であふれた社会にしていけば、子どもを産み育てることへの不安を減らすことができ、少子化問題を解決する第一歩になるのではないのでしょうか。



入選

「貯水中」

学校法人星美学園静岡サレジオ中学校 一年

皆川 溜花

小さな親切。私は自分が日頃どのようなことをできているか考えてみた。バス通学で、運転手さんに降車時「ありがとうございますございました。」と言っている。小さな子に優しく接している。近所さんに挨拶をする。どれもとっても普通のことだ。ボランティア活動のような大きな名目がないと、自分が親切をしているとは思えないのが本音だ。

そこで、私がしてもらった親切を見つめ直すことにした。親切にすることは、逆の立場になるが、親切にしてもらった経験はまだ十二年間しか生きていない私にとつてはたくさんある。

私は今年の冬、胃腸炎で夜間救急に行った。その時、熱、嘔吐、頻脈の症状があり、とても辛かった。医師から処方された薬を院内で飲んだが、すぐ吐いてしまった。帰

宅後も嘔吐が続き、寝付けずに苦しんでいた時に、母の携帯が鳴った。母から、さっき診てくださった医師からの電話だったことを知らされた。

「まだ吐き気や熱があるようなら、今から救急外来に行ってみて？今日は市立病院だから。どうしても、あの時脈が早かったのが気になって、体調落ちついたか心配していたんです。」

その後私はすぐに市立病院に行った。

今思えば、その先生は医師として当然のことをしたのかもしれない。その日、私以外にもたくさんの方がいた。それでも、私の症状を気にして、勤務時間を過ぎても電話をくれた先生の気持ちがとても嬉しかった。

この経験を思い出す度に、私は心がいっぱいになる。器に水滴が溜まっていくような感覚に似ている。小さな一滴ずつの水だけど、入った時にポチャンと大きな音を立てる。まるで、私を大事に考えてくれているんだよと主張しているように。そして、もうこんなに器に水が溜まっているよと

言っているように。小さな親切はこの水滴だと思ふ。相手にその水滴が入らなければ、親切にはならず、親切にしたと思った人の自己満足になる。その反対も然りで、親切とは思っていないくても、相手がそう受け止めて心の中のコップに水滴が落ちたなら、それは親切になる。

迷子になって、助けってもらったこと。家の鍵を忘れて、隣のおばさんに母が帰宅するまで一緒に過ごしてもらったこと。兄に遊びに連れて行ってもらったこと。大叔父にピアノの発表会で大拍手してもらったこと。全て今私の心の器にこれらの親切の水滴がいっぱい溜まっている。

親切というものをボランティアのような形式に私は囚われていたが、いつでもどこでも誰でもできるんだと考え直した。私も自分が今まで貰った水滴を他の誰かにあげられるようになりたい。そしてもちろん、自分にも水滴をあげて、自分を大事にすることも怠らない。ただいま、私はたっぷり貯水中。

みんなのヒーロー

静岡市立清水第五中学校 一年

宮城島 航

いつも通りサッカーの練習で、バスに乗って、サッカーの練習場に行ったときのことだった。

今日もいつも通りバスに乗って、バスが動くのを待っていたが、バスがなかなか出発しない。ぼくは、なぜバスが動き始めなのか気になってあたりを見回していたら、バスの運転士さんと、バスに乗ろうとしていた車いすの人が何かやっていた。よく見てみると、車いすの車輪が溝にはまってしまっていた。ぼくはドアの近くだったので、この状況を知っていたが、他の人たちは、車の走る音やエンジン音で、気づいていなかった。なかなか車いすの車輪がはずれず、バスも出発する状況ではなかった。この状況が続いていくうちに、バスの車内はざわついてきた。そのざわつきの中には、「なんで出発しないんだよ。」や、

「早く出発しろよ。」という声も、ざわつきの中にはあった。車内はどんどん重い雰囲気になっていった。ぼくは、今の状況を伝えようと思った。だが、なぜか言葉が出てこない。言えたと思いきや、だれにも聞こえないくらい小さな声しか出なかった。そこに一人の高校生が声を上げた。その高校生も、ぼくと同じで、ドアの近くに座っていたので、この状況を知っていた。その高校生は、「今、車いすの人が溝にはまってしまっ、運転士さんが助けています。なので、もう少しまってあげてください。」そう言うと、その高校生は、パツと外に出て、運転士さんと同じく、車いすの人を助けにいったのだ。その高校生の発言力、そして行動力に、ぼくは感動した。それに比べ、ぼくは、この状況を知っておきながらも、行動も、発言もできなかった自分、許せなかった。その後、心無い言葉はなくなった。そして、車輪も無事に取れ、車いすの人も乗車した。バスが出発し、いつもの光景に戻った。

ぼくは、バスが揺れ、練習場に向かう中、

自分の情けなさに後悔していた。そうしていると、僕の前に立って、だれかが話しかけてきた。顔を上げると、さっき声を上げた高校生だった。高校生は、「君、さっきの車いすの人の状況を言おうとしていたでしょ。ぼくには分かったよ。君のような人がいて良かった。その言おうとする気持ちを大切にしていね。」そう言うと、バスをあとに行ってしまった。ぼくは、あんな高校生になりたいと思った。あの高校生は、ぼくのがれの人になった。ぼくもあの高校生みたいに、発言力、行動力すべてが完璧で、みんなのヒーローになる存在になりたいと思った。あのとき会った高校生に会うことができるかは分からないが、あの高校生みたいになって、あのときの高校生が喜んでくれるくらい成長して、みんなのヒーローになりたいと思った。



入選

親切なアドバイス

磐田市立城山中学校 二年

宮地 虎徹

「僕は息継ぎを右からするよ。」

夏休み中、水泳部の友達とプールに行った。そこでクロールを教えてもらった。僕の課題は息継ぎ。十分に息が吸えなかったり、口の中に水が入ってきたりと、とても苦しかった。体育の時間が来なければいいのに、と思っていた七月の僕を救ってくれたのは、冒頭の友達だ。

「コーチ」とか「指導」などという堅苦しい雰囲気ではなく、遊びの延長線のように感じた感じでアドバイスをしてくれた。まず彼はクロールを実演して見せてくれた。次に僕がどこまでできるか泳いでみた。「今まで一度も息継ぎ、うまくいったことないんだよねえ。」
と言う僕に、彼は笑って息継ぎのやり方を教えてくれた。

息継ぎは、右側でも左側でも、やりやす

い方で良いこと。息を吐いてから吸うこと。

そして、息は短時間で素早く吸うこと。

「わかった、やってみる。」

小学校のときに、確か息継ぎは左側でするものと教わったはずだけどなあ。右利きの僕は右側のほうが楽に息を継げる。

「その調子。」

友達の言葉がうれしかった。泳ぎながら、友達のアドバイスでスムーズに息が継げることを実感した。息継ぎと息継ぎの間が苦しくならないし、口の中に水も入ってこない。

ザバア。水から顔を上げた僕を、友達は見守ってくれていた。

「どうかな。十五メートルくらい泳げたよ。」

「うん。教えてもらったおかげで息継ぎのコツがつかめたよ。」

その後、僕は何回かクロールの練習をした。その日、プールに入ったときの僕は息継ぎがまったくできなかった。それなのに、わずか一時間後には息継ぎをしながら二十五メートルも泳げるようになっていた

のだ。

「ありがとう。」

「よかったね。じゃあ、泳いで遊ぼうか。」

「そうだね。」

と答えた僕は、自分の心がとても軽くなっていることを感じた。今までは、平泳ぎしかできず、泳ぐことが苦手だった。それが、友達のアドバイスによって泳ぎ方の選択肢が増えたのだ。泳ぐことへの不安がなくなった。

できる人にとっては、できない人の苦しみや不安が想像しにくいだろう。また、できなかつたことができるようになったときの喜びの大きさも。

その友達にとっては、息継ぎはとても簡単なことで、コツを教えてあげることもささいなことだったと思う。「ちょっと親切にしてあげただけ」という感覚だっただろう。しかし、僕にとっては「小さな親切」ではなく「大きな親切」だった。僕も、自分の知識や技術などを誰かに分けてあげたい。